蓮華王院三十三間堂は、後白河院の御願として備前守平忠盛奉行し、千体御堂を建立す。〔堂東向、南北六十六間、二間を隔て柱を立たれば三十三間堂といふ〕本尊は千手観音の坐像にして、御丈八尺、作は康慶なり。二十八部衆おの〳〵壇上に安置す。千手観音一千体は堂内左右にまします、運慶湛慶の両作なり。抑後白河法皇は常に頭痛の御悩ましませば、医療さま〴〵なりしかども其験更になし。ある時熊野に御幸ありてこれを祈らせ給ふに、権現告て宣ふやうは、洛陽因幡堂に天竺より渡る妙医あり、かれに治療を受給へと、是に依て永暦二年二月廿二日因幡堂に参籠して、ひたすら祈給ふに。満ずる夜貴僧忽然として又告ていはく、法皇の前生は熊野にあつて蓮華坊といふ人なり、海内を行脚して仏道を修行す、其勲功によつて今帝位に昇れり、されども前生の髑髏いまだ朽ずして、岩田河の水底にあり、其頭より柳の樹貫て生る、風の吹毎に動揺す、則今身に響て此悩をなせり、急ぎかの頭を取上なば苦悩を免るべしと、香水を以て法皇の頂に洒と思召て夢覚たり。頓てかの所を見せしめ給ふに、河底より髑髏を得る、則これを観音の頭中に籠、三十三間堂を建立して蓮華王院と号す。かの柳の樹を堂の梁となさしむ。〔以上平等寺縁起の意〕又或説には、鳥羽上皇得長寿院を御造営ありて、一千体の観音を安置す、後改て蓮華王院と号すともいへり。〔築地の瓦には秀吉公の桐の御紋あり、門外の下馬札は佐々木志津磨が筆なり〕堂前に夜泣泉あり、傍に池ありて春のすゑより初夏に至り燕子花咲乱れて、濃むらさきの色池の面に麗しく、京師の騒客廻りの茶店に宴を催して終日これを美賞す、当寺の佳境なり。

大矢数の濫觴は、新熊野観音寺(いまくまのかんおんじ)の別当栂坊射術を好みて、八坂(やさか)の青塚(あをづか)の的場へ通ふ、帰さに当寺の後堂に休み射初しなり。夫より連年諸侯の家臣出て射術の誉を争ふ。当所より通矢の検証出で、其一を蒙るものには金銀の麾を渡す。尾州(びしう)よりは星野勘(ほしのかん)左衛門八千箭を通し、貞享三月四月廿七日紀州和佐台(きしうわさだい)八郎総矢一万三千五十三通矢八千百三十三数にして一を得たり。